

# アルコール・ハラスメントとドメスティック・バイオレンス



放送大学客員教授、奈良女子大学名誉教授、  
日本社会病理学会会長

清水 新二

イッキ飲みや飲酒の強要など、意図的に酔わせるといったアルコール・ハラスメント（アルハラ）は1980年代以降、社会的な問題となり、防止への取り組みも行われてきましたが、未だになくなってはいません。また、関連してドメスティック・バイオレンス（DV）の問題もあります。今回は長年にわたって、アルコール関連問題を研究・調査してきた社会病理学者の清水新二先生にお話を伺いました。

編集部

## ● アルコール関連問題にはソーシャルケアが必要 ●

私がアルコール問題を手がけるようになったのは、大阪市立大学にいた頃、恩師の仕事を担当するようになったことがきっかけでした。毎週、いわゆる「断酒会」を回るようになり、その後、大阪の阿倍野に日本初のアルコール専門外来クリニックが立ち上がったとき、アルコール依存症の患者本人と家族のグループミーティングを担当することになったのです。

1980年代当時、アルコール依存症は入院治療が中心でしたが、医学的な治療が終わっても、退院して外に出るとまた飲んでしまう人も多く、最初の2〜3年の治療成績は惨たんたるものでした。当時は、自販機やコンビニなどでも簡単にアルコールが手に入り、街中には居酒屋などもたくさんあるの

で、地域で日常生活を送りながら断酒を続けるのは難しいのです。しかし、入院治療でいったんアルコールを断つことができたなら、退院後もやめ続けることが回復のポイントとなります。

「アルコール依存症」という言葉は以前からありましたが、その後、社会面や対人面などを含め、もっと広く包括的に問題を捉えるための概念として「アルコール関連問題」という言い方が一般的になってきました。

「アルコール依存症」という言葉は以前からありましたが、その後、社会面や対人面などを含め、もっと広く包括的に問題を捉えるための概念として「アルコール関連問題」という言い方が一般的になってきました。

## ● 日本では人間関係構築に共同飲酒が必要だった ●

東アジアを中心に共同飲酒の習慣がある国や地域は多く、中国や韓国でも大勢でワイワイ飲むシーンがよく見られます。また、昔とは変わって、最近では女性が飲む機会も増えているようです。では、共同飲酒が日本独自の習慣でないにもかかわらず、日本以外ではアルハラの問題があまり聞かれないのは、なぜでしょうか。

厳密に言うことはできませんが、中国、韓国などは血縁社会であり、血縁が確認できれば、わざわざ仲間意識を高める必要はありません。一方、日本は企業などの組織内での上下関係を重視する縦社会で、仲間を身内化する傾向がありました。日本

ました。アルハラもアルコール関連問題の一つと言えるでしょう。それは体や心だけでなく、生活全般に関わる問題なので、医学的なケアだけでは解決が見込めず、そこにソーシャルケアが必要になるわけです。

クリニックで週1回のミーティングを15年ほど続けた結果、アルコール関連問題には家族、職場、地域などの人間関係の調整が重要だとわかりました。生活上の問題やストレス、トラブルなどがあると、飲まずにはいられなくなってしまいます。そして、家族も一緒に理解を深めて二人三脚でやっていかなければ、お酒をやめ続けることはできません。

## ● 相手が困惑していればハラスメントと言える ●

アルコール・ハラスメントとは、「飲みたくないのに、酔いたくないのに、あるいは体質的に飲めないにもかかわらず、飲むこと、酔うことを強要され困惑する」「その上、飲まない時には嫌がらせ、蔑み、冷遇によって否定的な対応をされる」といった経験をすることです。「オレの酒が飲めないのか！」「まだ酔っていないじゃないか！」「一杯くらいい！」などと言って強要される場面を見たことがある人も多いのではないのでしょうか。

では何かと縁を作り、コミュニケーションを取るための潤滑剤としてアルコールが使われ、飲酒が人間関係の構築・保持・修復のために大いに利用されてきたのです。新人が入ってくれば歓迎会を開き、みんなで集まって慰労会や運動会などのイベントを行うこともありました。外部の人と横のつながりを深めようとするときにも、一席設けてお酒を酌み交わしました。仲間意識を確認し、ネットワークを広げるための小道具として、お酒はたいへん便利なものだったのです。

欧米でもお酒は、ソーシャルミキシング（社会的攪拌機）と呼ばれています。パーティーではアルコール入りのソーダパンチが振る舞われ、会食でワインを楽しんだり、クリスマスやお祝いにはシャンパンを飲んだりします。アルコールが入ると楽しい気分になり、饒舌になって会話が弾みます。彼らだって、仲間とのコミュニケーションにアルコールを活用することは珍しくないのです。しかし、お互いのグラスにお酒をつぎ合うことはしません。日本では周りの人のグラスを見て、お酒が少なくなったらつぎに行ったり、「おかわりは？」と聞いたりしますよね。これも「お酒はともに飲むものだ」という考えからでしょうが、すすめられると断りにくく、結果的にたくさん飲んでしまいがちとも言えます。

もともと日本人には体質的に飲めない人が多く、飲める人でもあまり酔いたくない日もあるでしょう。飲みたくないのに飲まされ、飲まない嫌がらせにあう。それがわかってい

るからこそ、そのリスクを回避しようとして仕方なく飲むことになってしまうのです。アルハラになるかどうかは、強要されたことで相手が困惑しているかどうかが決ま手になります。主観的とも言えますが、あくまでも強要されたほうが嫌がって困惑した体験があれば、アルハラです。

## ● 日本でアルハラが生じやすい3つの理由 ●

日本でなぜアルハラが生じやすい

かという点、いくつかの理由が挙げられます。一つ目は、体質的な要因です。日本人にはALDH（アルデヒド脱水素酵素）の活性が弱いか欠けているので生まれつきアルコールを受け付けない人が多いため、単にお酒をすすめるだけでも無理強いになりがちです。人種的に白人と黒人はALDH欠損型が極めて少ないの

に對し、モンゴロイドの日本人では欠損型が4割を超えており、そのような生物学的要因からアルハラが起りやすい地盤があるのです。二つ目は、文化的な要因です。日本でお酒を飲むことは、アルコール自体だけでなく、「仲間との人間関係」を飲むという意味合いが強いと言えます。もともと日本の神様はお酒が好きで飲酒に寛容でもあり、お正月やお祭りのときには御神酒をいただき、みんなで神の力を分かち合っ

て村の豊作や穏やかな生活を願いました。あるいは結婚式の三々九度のような儀式でも、神様との関係にお酒がありました。神様と同じとは言いませんが、上司や先輩のような目上の人からお酒をすすめられたら、無下には断れません。お酒をつがれることは、好意を受け取ることであり、好意を受け取ることで「ありがたく頂戴します」と飲み干すべきとされています。逆に、そのような酒席の場に呼ばれないのは、不名誉なことと捉えられます。

● ● 飲み放題には  
イッキ飲みリスクがある ● ●

テレビ番組などで「イッキ！イッキ！」というかけ声とともにイッキ飲みをするのが流行したのは1984年のこと。翌年には「イッキ」が日本流行語大賞にも選ばれた。その頃からアルハラも社会的に問題視されるようになり、認知件数も増えていきました。海外にも目を向けてみると、国による認識の差も大きく、欧米ではアルコール関連問題の研究は進んでいます。中国などでは問題視されていないため、ほとんど話題になりません。

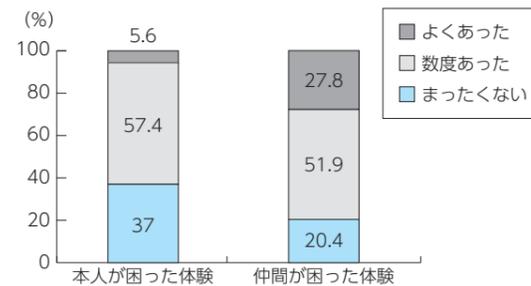
イッキブームからしばらく経っても、学生の飲酒事故はなくなり、死亡事故や性的な暴行事件なども起きています。それをきっかけに、私はかつてイッキ飲みの問題について大学生を対象に調査を行ったことがあります(図表1)。この結果を見ると、「お酒を強くすすめられて困った体験」が「よくあった」と答えた人は5.6%で、それほど多くないと感じるかもしれませんが、しかし、仲間が困っているのを見たことが「よくあった」という人が3割近くもいるのは、見逃せません。つまり、当時は飲酒の強要が日常的に行われていたということでしょう。

もう一つ、「飲み放題」に関する調査も行いました。「飲み放題でイッキ飲みが起きやすいか」という質問に対しては、「起きやすい」という回答が7割前後となっています(図表2)。「元を取りたいか」との質問には、「大いにそう思う」「そう思う」を合わせると、男子で6割近く、女子では65%以上となり(図表3)、「飲み放題は酔いやすいか」との質問には3割以上が「酔いやすい」と答えています(図表4)。飲み放題にするとか何杯飲んでも料金は同じですから、ある程度は飲まなければという意識が働いて、イッキ飲みが起きやすく、酔ってしまうリスクがあります。決しておすすめできない飲み方です。

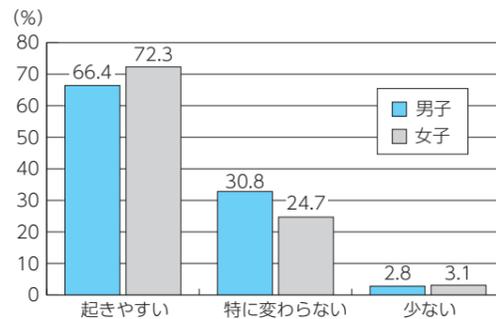
特に若い人が危険なのは、アルコールの怖さがよくわかっていないことです。自分の適量がどれくらいかわからず、お酒が人体にどのような影響を及ぼすかも知らずに、ゲーム感覚で飲んだり飲ませたりして、命に関わるような重大な事故を起こすことがあるのです。嫌がる人に無理に飲ませたり、具合が悪くなったりは、飲み会の場も楽しくありません。

最近では、地域や親族同士で飲むといった文化的な伝承の場が少なくなってきたりしますが、年長者の飲み方を見ながら理解していけるような飲酒学習の場が必要かもしれません。「アルコールは危険だから飲まないほうがいい」と禁止するだけで

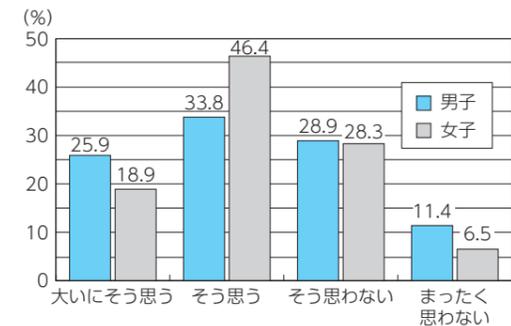
図表1 イッキ飲み(大学生)  
お酒を強くすすめられて困った体験



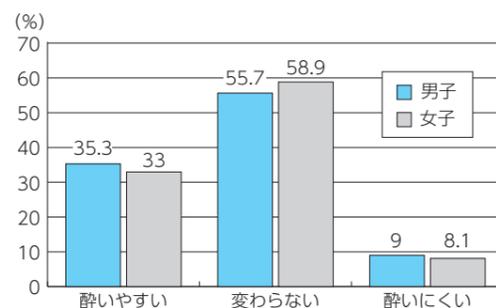
図表2 飲み放題でイッキ飲みが起きやすいか



図表3 飲み放題で元を取りたいか



図表4 飲み放題は酔いやすいか



図表1～4は、2005年の調査結果

● ● アルハラはこれから  
だんだん減っていく? ● ●

時代の流れの中で、アルハラも変容を始めています。近年では、アルハラ認知件数は次第に減ってきており、今後もだんだん減っていくと私は思っています。なぜかという

と、大学の新入生歓迎会などで急性アルコール中毒による事故が多発したこと、積極的な取り組みが促進されるようになったためです。2012年5月には文部科学省から各大学に「飲酒事故防止を求める通知」が出され、その後も継続されています。大学側から学生に対しても、

大学生活の手引きなどに注意文を記載したり、新入生が入ってくる時期やイベントの前などにはアナウンスをしたりして、注意を喚起しているようです。

大学の部活やサークルでは、上級生から下級生へ引き継がれている伝統的な飲み方があつたりするものです。今でも一部には残っているようですが、現在はキャンパス内での飲酒は禁止されているところが多く、周辺の居酒屋などでも年齢確認が厳しくなっています。

大学よりも、さらに変わったのは

● ● アルコールとDVとの  
密接な関係とは ● ●

お酒の問題を広く捉えると、健康障害や依存症なども深刻ですが、家庭内暴力の多くにはアルコール絡んでおり、DVの問題も避けられません。まだあまり認識されていませんが、DVもハラスメントの一つに含まれると思います。冒頭でも申しましたが、大きくハラスメントを考えると、被害者に「困惑感がある」ということが挙げられます。アル

コールを飲むと、大声で怒鳴る、機嫌が悪くなる、無視する、あちこちに電話をかけまくる、ツケで飲んでしまう、などいろいろな困惑体験が

あります。そして「いい加減、お酒はやめたら?」などと言うとキレる人も少なくありません。大学の部活やサークル、職場などよりも家庭内のハラスメントの被害はもっと深刻なことが多いのです。私はもう少し、DVの問題も広く知ってもらいたいと考えています。

私自身の「DV行動の発生頻度」の全国調査結果によると、「アルコール依存症者」によるDVは、言葉によるもの・社会的・経済的・性的・身体的なものとのどれを取っても、一般地域住民と比べて圧倒的に多くなっています(図表5)。なかでも最も多いのが、言葉による暴力であることに注目してほしいと思います。

DVが取り上げられるようになってきたのは「男性から女性に繰り返される身体的な暴力」とされています。しかし、定義を身体的な暴力に限ると見過ごされてしまいがちですが、言葉による暴力も相当あるということが次第にわかってきたのです。毎日、殴ったり暴れたりではなくても、あるとき爆発してケガを負わされたり、包丁や銃を突き付けられて脅されたりした体験がある、ならまれただけでも体がすくんでしまうでしょう。言葉の暴力や脅しは、身体的な暴力と同等の効果を持つので、これを捉えなければいけません。

また、「俺たちにも経験があるよ」と男性からも声が上がることが多い。双方向性仮説(注1)を調査したところ、DVは男性から女性へという一方的なものではないことがわかったのです。実際に妻やパートナーからの暴力、言葉の暴力を受けている男性もおり、これまでの定義を変えなければならなくなりました。

もう一つ、私たちの調査結果※として明らかになってきたのは、世代間伝達仮説(注2)です。思春期にあたる15歳よりも前に、家庭内でDVを目撃したり、被害を受けたりすると、将来、自身が加害者や被害者になる確率が高くなるのです。暴力的な家庭で育った子どもたちには、総合的な社会的対応が求められます。

● ● アルコールをやめると  
DVは治まる? ● ●

断酒をした人の、飲酒をしていた当時と断酒に成功した現在を比較した「アルコール依存症クリニック臨床調査」によると、あらゆるDVが減っていることがわかります(図表6)。アルコールをやめればDVがなくなるのは単純に言えませんが、DVが起る要因としてアルコールの関与が大きいことは明らかであり、特にアルコール依存症

